

# 野町納樂遺跡

福岡県筑後市大字野町所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書  
第 76 集

2007  
筑後市教育委員会

のまちのうがく  
野町納樂遺跡

2007  
筑後市教育委員会

## 序

筑後市野町地区では今回初めて遺跡の発掘調査が行われました。

周辺地域では狐塚遺跡や裏山遺跡など著名な遺跡が発見されており、野町地区におきましても以前から遺跡の分布が予想されておりました。

当市では現在も各種開発による緊急発掘調査が増加の一途を辿っており、破壊を受ける可能性がある遺跡を記録保存として調査を行い、貴重な財産である文化財の保護に努めているところであります。本来であれば、地下に眠る遺跡が現状で保存され、その土地に残ることが最善であるのは言うまでもなく、「保存」こそが絶対的に有効であり、文化財保護行政における使命と考えております。

昨今、急増する開発事業により記録保存として発掘調査を実施し、国民共有の財産である調査成果を文化財調査報告書として刊行し、住民サービスとして地域に還元するといった「文化財の啓発活動」も行政の役割であると考えております。

調査された成果から、先人たちが遙か昔からこの土地で暮らしていた生活の一端を紐解き、学術研究、生涯学習等の一助として活用いただき、目まぐるしく変化する現代社会の道標として役立てれば幸いです。

本報告にあたり、地権者並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜った事を深く感謝申し上げます。

平成19年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 城戸一男

## 例言

1. 本書は平成17年度に筑後市教育委員会が行った野町納楽遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は上村英士が作成し、遺物の実測、浄書は猿渡式子が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002に準拠している）。  
SD - 溝 SK - 土壌 SP - ピット SX - 不明遺構  
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
7. 本書の編集、執筆は上村が行った。

## 目次

I . 調査経過と組織	1
II . 位置と環境	2
III . 調査成果	3
IV .まとめ	13

写真図版

## I. 調査経過と組織

野町納楽遺跡は筑後市大字野町字納楽に所在する。平成 17 年 7 月に開発原因者である株式会社ホームドライより当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を実施した。試掘調査の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地の建造物構築部分の 352 m<sup>2</sup>については遺構が破壊を受ける可能性があるため本調査を実施することで合意し、平成 17 年 9 月 26 日に「野町納楽遺跡埋蔵文化財発掘調査」委託として契約を締結した。調査費用は全額株式会社ホームドライに負担いただいた。平成 17 年 9 月 26 日から平成 17 年 10 月 31 日まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成 19 年 3 月 31 日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

### 1) 平成 17 年度（事前審査）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	蓮原 修
庶務	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化スポーツ係	永見 秀徳（事前審査担当）
	（文化財担当職員）	小林 勇作
		上村 英士
		阿比留土朗

### 2) 平成 18 年度（調査、報告書作成）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	（文化財担当職員）	小林 勇作
		上村 英士（本調査、報告書担当）
		阿比留土朗

### 3) 発掘調査参加者

地元有志

### 4) 整理作業参加者

整理補助員 丸山裕見子 猿渡 式子

整理作業員 野口 晴香

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

小鹿野 亮（筑紫野市教育委員会）、立石 真二（那珂川町教育委員会）

## II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する長崎地区は市のほぼ中央に位置し、近年は国道209号に沿った形で市街化している地域である。



Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)

1. 野町能楽遺跡
  2. 長崎坊田遺跡（第23集）
  3. 和泉糀町遺跡（第65集）
  4. 和泉小山口遺跡
  5. 和泉近道遺跡
  10. 久清遺跡
  11. 井原口遺跡（第4集）
  12. 上北島篠島遺跡（第39集）
  13. 狐塚遺跡（第2集）
  14. 上北島花畠遺跡（第28集）
  15. 上北島塚ノ本遺跡（第31集）
  16. 平塚遺跡
  17. 鶴田木屋ノ角遺跡（第36集）
  19. 山ノ井川口遺跡（第45集）
  20. 山ノ井南野遺跡（第59・64集）
- 括弧内数字は筑後市文化財調査報告書所収の番号

### III. 調査成果

#### (1) はじめに

調査区は工場建設部分のため、遺跡範囲 1898 m<sup>2</sup>のうち、約 352 m<sup>2</sup>の本調査を行っている。現況は駐車場である。遺構の掘削は表土から遺構面までを（有）フクシマ重機（代表取締役 井上広志）に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。

層位は約 80 cm の盛土下に約 60 cm の包含層を検出し、包含層を除去した黄色粘、黄色砂の地山に切り込む形で遺構を検出している。遺構は溝、ピット、波板状連續土壌群、不明小ピット群を確認した。各遺構共に出土遺物は殆どない。

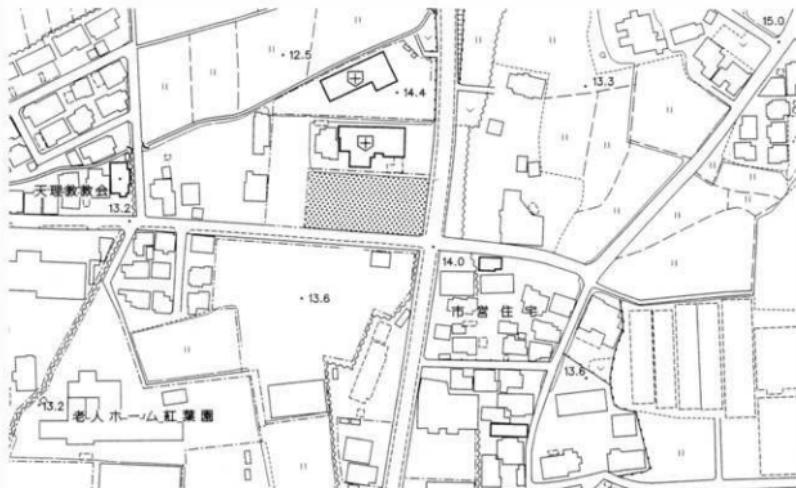


Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

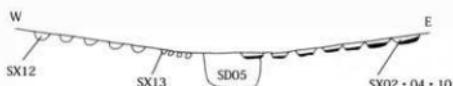


Fig.3 調査区 基本土層模式図

S番号	遺構番号	備考	7	波板状連續土壌の一部
1	SD01	溝	8	波板状連續土壌の一部
2	SX02	不明遺構	9	波板状連續土壌の一部
3	不明遺構		10	S3・6～9・11波板状連續土壌群
4	SX04	不明遺構	11	波板状連續土壌の一部
5	SD05	溝	12	SX12 a～dd波板状連續土壌
6		波板状連續土壌の一部	14	不明ピット群

Tab1. 遺構番号台帳

## (2) 検出遺構

溝

### SD01 (Fig.4)

調査区南端で検出した溝の一部である。現況の土地境界に平行しており、溝断面の半分程度の検出である。検出長約 19 m、深さ約 0.3 m を測る。遺物は同安窯系青磁碗×皿片、黒曜石石族を出土している。

### SD05 (Fig.4, Pla.2)

SD01 に切られる調査区中央東寄りを北東から南西に貫く溝である、検出長約 15 m、検出幅約 2.2 m、深さ約 0.8 ~ 0.9 m を測る。断面は下層で袋状を呈し、2 時期を想定する。埋土は粘質土系で遺物は土師器环片、黒曜石剥片 2 点のみである。溝埋没後、SX (波板状の連続土壌群) が形成されている。

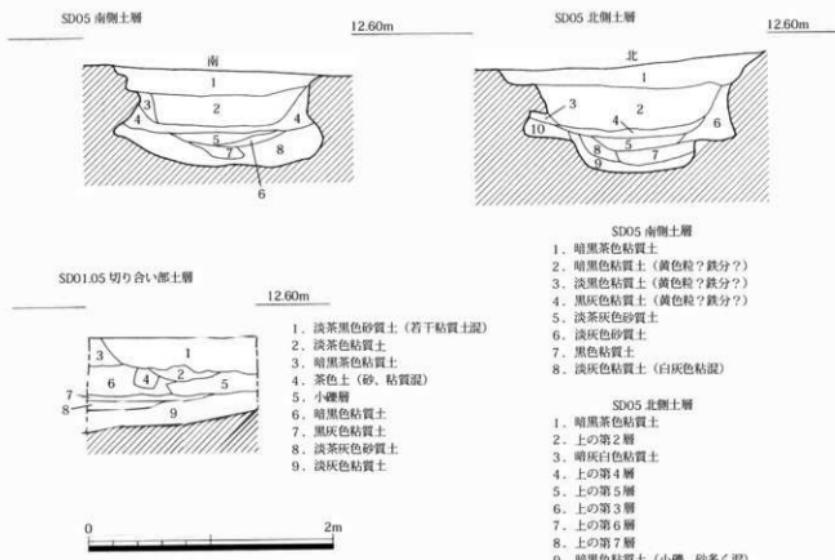


Fig.4 SD01・05 土層図 (1/40)

不明遺構・波板状連続土壌

### SX02 (Fig.5・6, Pla.3 ~ 5)

調査区東南で検出した不定形な遺構で、東端で溝状を呈し、調査区外へ延びる。完掘状況では東端から 1 本の溝状遺構（壙底に小石を敷き詰める）が放射状に枝分かれし、3 本程度の波板状の連続土壌を展開する。壙底レベルは西へ低くなり連続土壌は階段状を呈する。埋土は第 2 層である淡灰茶色土に硬化が見られるが平面・断面から突き固め痕跡は確認していない。遺物は小石敷き詰めの中に白磁片を出土している。

### SX04 (Fig.5・6, Pla.4)

SX02 の西隣で検出し、SX02 を切る遺構である。完掘状況では SX02 から派生する放射状の連続土壌を呈する遺構である。出土遺物は皆無である。

#### SX10 (Fig.9、Pla.5 ~ 7)

SX02 北側で東西に検出した波板状の連続土壤群である。SD05 埋没後に形成されている。遺構東端では検出時は溝状を呈し、完掘時で円形の土壤群となる、西側では長軸約 0.7 m、短軸約 0.3 ~ 0.4 m、最大深さ約 0.07 m 程度、土壤間隔約 0.3 m 前後の楕円形連続土壤を呈する。底部には小石を敷き詰め、SX02 と同様に壙底は階段状を呈し、西側へ低くなる。埋土は東端では硬化した淡灰茶色土下に黄色土（ブロック）を検出し、小石群へと展開し、西側は硬化した淡灰茶色土下に小石群を検出している。出土遺物は皆無である。

#### SX12 (Fig.12、Pla.7 ~ 9)

調査区中央北寄りで検出した計 30 個の連続土壤群である。土壤形状は円形に近い形状をとり、西側から東側へ放射状に枝分かれする。地形が東側へ低くなるため遺構壙底はそれに伴い低くなる。埋土は若干の分層ができるが、基本的には淡茶灰色土（砂質）であり 1. 小石が混ざるもの、2. 壙底に敷き詰めるもの、3. 小石を一切含まないものに分けられる。また、埋土に黄色粒（約 1 cm 前後）が入り、一部にその方向を示すものがある。土質に関しては SX02・04 と色は近似するが砂質系であるため異なる。出土遺物は皆無である。

#### SX13 (Fig.12、Pla.9・10)

SD05 西側で検出した不明小ピット群である。一単位約 0.1 m ~ 0.2 m の楕円形に近い形状を呈し、4 箇所程度に群を形成している。埋土は粘質系の茶色土に黄色土がマーブル状に入る。一部では牛、若しくは馬の足跡状に痕跡が残り、群の中にある一定の方向性が見られた。

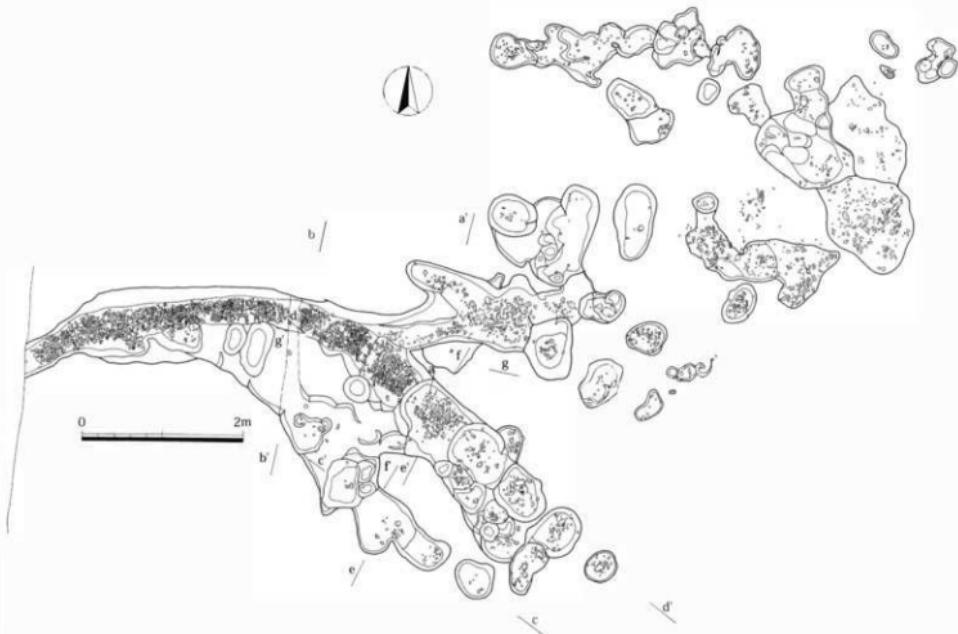


Fig.5 SX02・04 平面図 (1/60)

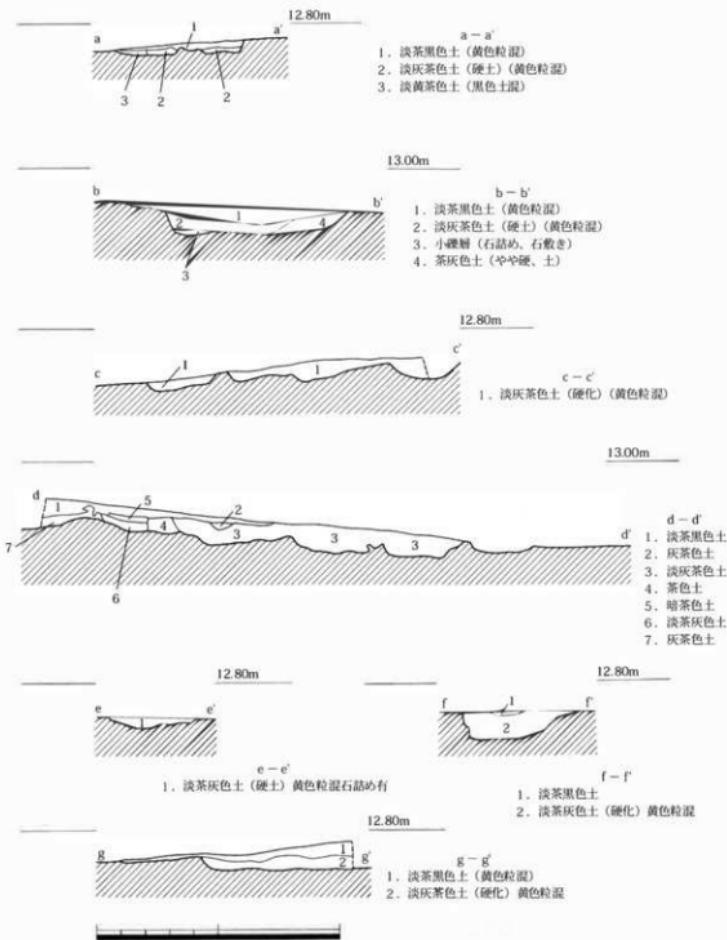


Fig.6 SX02·04 土層図 (1/40)

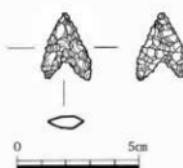


Fig.7 SDO1 出土遺物 (1/2)

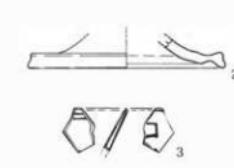


Fig.8 摘乱出土遺物 (1/2)

### (3) 出土遺物

SDO1 (Fig.7、Pla.11)

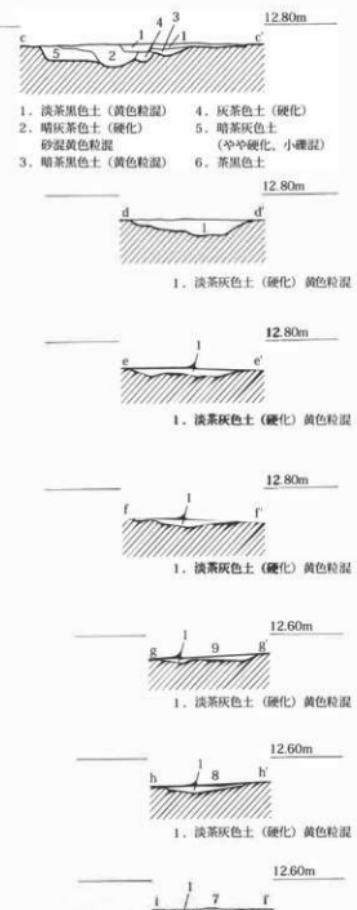
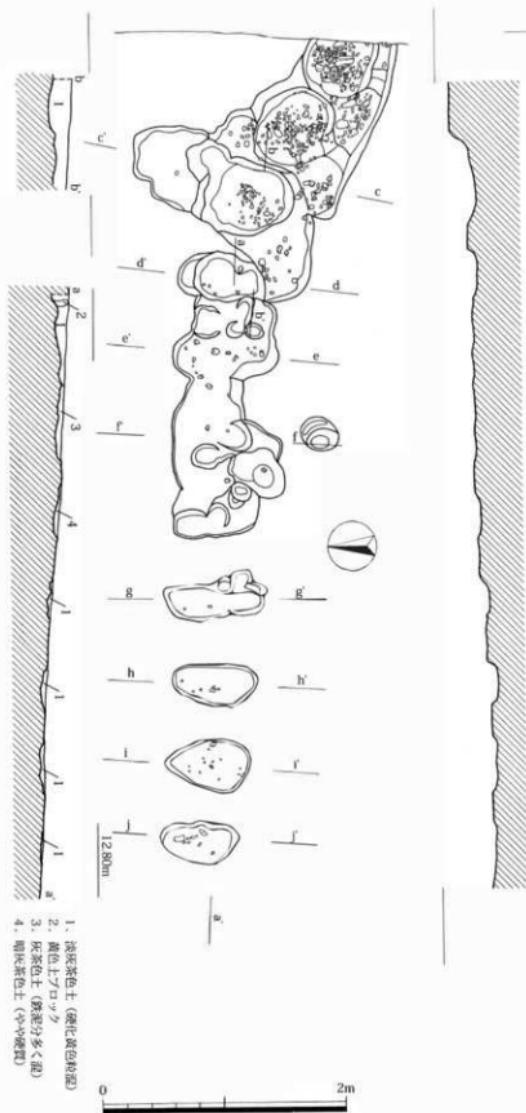


Fig.9 SX10 実測図 (1/40)

石製品

石族 (1) 黒曜石製の石族である。長さ 2.0 cm、幅 1.7 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 1.4 g を測る。

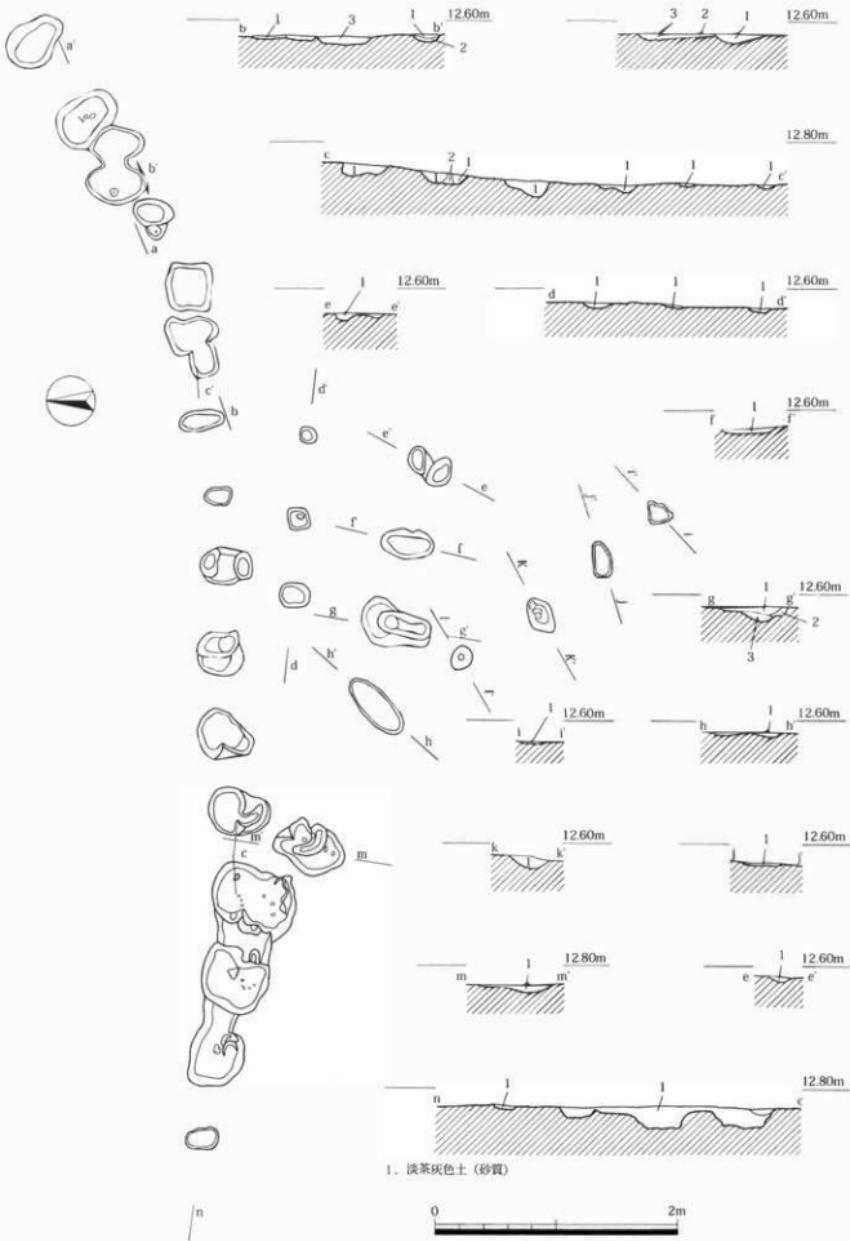


Fig.10 SX12 実測図 (1/40)



Fig.11 野町納采遺跡 略測図 (1/100)

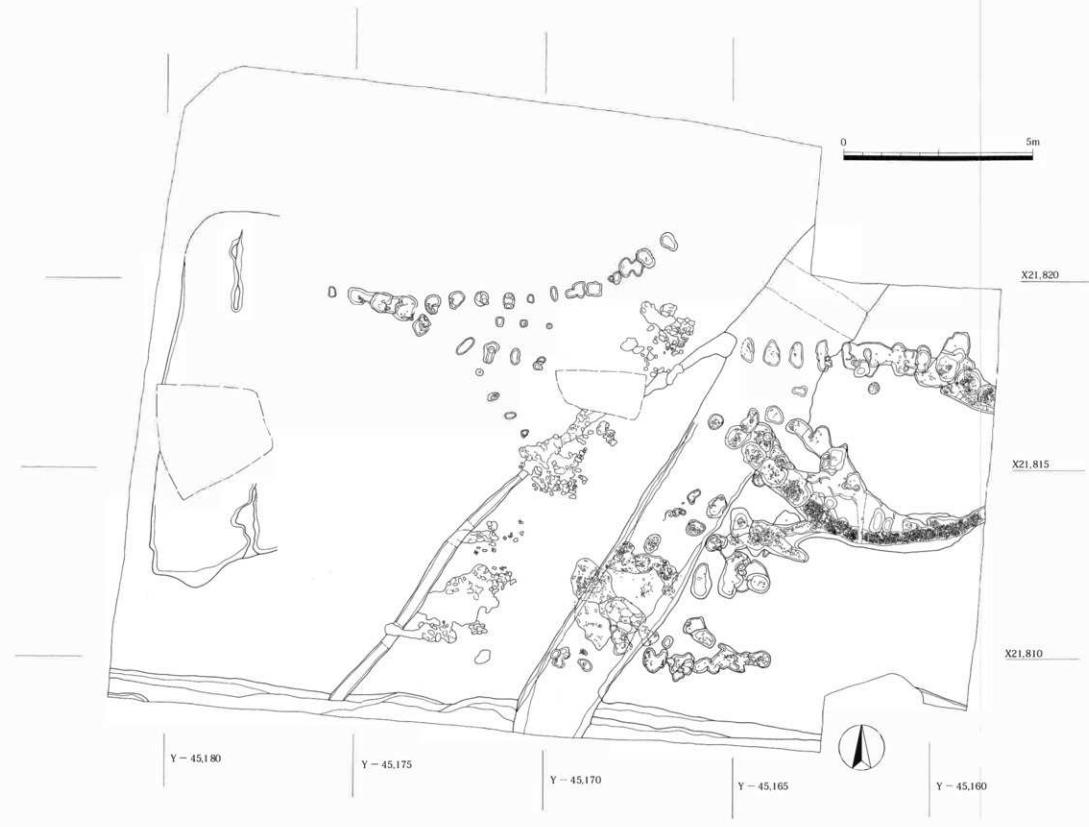


Fig.12 野町納楽遺跡 遺構全体図

撓乱 (Fig.8、Pla.11)

須恵器

高坏 (2) 高坏の脚部片である。裾部径 12.0 cm、残存高 1.8 cm を測る。胎土に黒色粒子を若干含み、還元良好である。

磁器

染付碗 (3) 碗若しくは湯呑の小片である。口縁内面に圓線、外面に文様を描く。

土製品

棒状土製品 (4) 残存長 4.8 cm、幅 3.2 cm の土製品で、2 面のみ残存している。2 次的な被熱痕が残る。

#### IV.まとめ

今回の調査では主に溝、波板状連続土壤を検出している。これらの遺構からの出土遺物が殆どない為、遺構時期を推定するのは困難であった。しかし、波板状連続土壤については当市内から数箇所で確認されており、以下に「波板状連続土壤」について考察する。

当市では久恵今町遺跡（筑後市文化財調査報告書第 30 集 以下第〇集）、常用ニラバ遺跡（第 51 集）、山ノ井川口遺跡第 1 次（第 45 集）、2 次（未報告）、羽犬塚山ノ前遺跡（第 48 集）、戸数保古手遺跡 2 次 A 区（第 70 集）で確認されている。各遺跡とも土壤若しくはピット状の遺構が連続して方向性を持つて配列された痕跡であり、自然流路や地形のようなものではなく、意図的に造作された痕跡と認められる。そのため、遺構埋土が硬化していたり、埋土中や壌底に石敷きを施した例も存在する。また、時期的には山ノ井川口、羽犬塚山ノ前については古代の道路状遺構に伴う痕跡、久恵今町、常用ニラバ、戸数保古手については中世以降の痕跡と考えられ、時期的な幅がある事や主体遺構（道路遺構に伴うものと単体で検出されるもの）を考えると、これらの痕跡には性格に違いがある事を示唆している。

今次調査での波板状連続土壤の特徴をまとめると以下の現象を指摘できる。

1. 波板状に検出されるものと溝状に検出されるものがあり、溝状のものについては掘削後に波板状連続土壤を呈するものがある（SX02・04・10）。
2. 連続土壤は階段状に掘り込まれる（SX02・04・10）。
3. 溝状部分も波板状連続土壤部分も壌底に意図的に小礫を詰め込んでいる（SX02・04・10）。
4. 溝状、波板状連続土壤も埋土に硬化部分が存在する（SX02・04・10）。
5. 波板状連続土壤群が放射状に枝分かれする（SX04・12）。
6. 平面形状が円形若しくは梢円形を呈する（SX02・04・10）。
7. 波板状連続土壤列軸は完全なる直線的ではなく大きく曲がったり、緩やかに蛇行している。
8. 各土壤間の間隔が比較的安定した状況である（約 60 cm ~ 70 cm 前後の値を示す部分が多い）。
9. 出土遺物が殆ど無い（一部溝状部分の小礫敷き詰め部分に白磁片 1 点のみ有）。

これらの点を踏まえ、遺構の性格について論じていく。

今までの研究による波板状連続土壤（波板凹凸面、波板痕跡と呼ばれるもの）の解釈について小鹿野亮は道路痕跡やその他に見られる痕跡の詳細なデータ分析により先学諸氏が提示した諸説についての可能性を指摘している（小鹿野 2003）。それによれば、「道路遺構の路面施工に伴う路床（以下、路床構築痕）」「牛馬が歩行した自然現象的作用による歩行痕跡（以下、牛馬歩行痕）」「重量物運搬の枕木痕（以下、枕木痕）」「路床痕と枕木痕の複合痕跡」「道路路面の二次的な補修痕跡」について分別した検討と解釈を行っている。大きく分けると「道路遺構に伴う道路施工に関する痕跡」と「牛馬歩行痕」に分けられ、今次調査で検出された各遺構は、どちらに共通性が見出されるのか検討しなければならない。

上記した今次調査の特徴のうち「道路遺構に伴う道路施工に関する痕跡（以下、A 痕跡）」に当てはまるものは 1・2・3・4・6・7・8 が該当し、「牛馬歩行痕（以下、B 痕跡）」には 1・2・4・5・6・7・8 が該当している。このように A・B 痕跡の類似性は非常に強く、非類似性について焦点を当てなければ分別が難しい。非類似性は A 痕跡該当 3 及び B 痕跡該当 5 である。しかしながら、波板状連続土壤は小鹿野も指摘しているように「道路に伴って検出される痕跡として認知されているが研究史上、最も

見解が分かれている。」と述べているように、道路遺構に伴うものもあるが、そうではない可能性もある事を示唆している。この根拠が「牛馬歩行痕」などの痕跡の評価によるものである。東和幸は各地で検出される道路遺構に伴う波板状連続土壌について「牛馬歩行痕跡」と論じており（東2002、2003、2004）、その性格については検討しなければならない。筆者自身が牧場で確認した牛道と呼ばれる波板状連続土壌も、今次調査で検出された遺構と非常に近似しており、その可能性については否定できない。

小鹿野は先に述べた論の中で波板状痕跡（波板状連続土壌）の分類の細分を行っている。立地は「大分類」として道路遺構の立地条件を挙げ、単体形状と分布形状を「中分類」、寸法（長径、短径、痕跡間ピッチ）を「小分類」、土壌（埋土、上層覆土との関係）を「最小分類」として整理している。この分類方法で今次調査の各遺構を整理すると以下のように分類できる（大分類の立地は道路遺構を前提に考えられているため除く）

分類（小鹿野分類から抜粋、定義については一部略） 対象となる野町納采遺跡遺構番号

中分類（単体形状）

- |                    |            |
|--------------------|------------|
| 1. 円形・梢円形プラン       | SX02・04    |
| 2. 長楕円形プラン         | SX10       |
| 3. 不整形プラン          | SX12       |
| 4. 瓢箪プラン<br>(分布形状) |            |
| A. 規則連続型           |            |
| B. 弱規則短距離方         | SX10       |
| C. 弱規則群集型          | SX02・04・12 |
| D. 群集型             |            |

小分類（長径）

- |                            |            |
|----------------------------|------------|
| a. 大型（1.2 m以上）             |            |
| b. 中型（0.8～1.2 m）           | SX02・04・10 |
| c. 小型（0.8 m以下）             | SX12       |
| d. 散発型（規則性がない）<br>(痕跡間ピッチ) |            |
| i. 狹小型（0.3 m以下にピーク）        |            |
| ii. やや狭小型（0.3～0.6 mにピーク）   |            |
| iii. 中型（0.6～0.8 mにピーク）     | SX02・04・10 |
| iv. 幅広型（0.8 m以上にピーク）       |            |
| v. 任意型（規則性がない）             | SX12       |

最小分類（埋土・覆土）

- |   |  |
|---|--|
| ①混合土 1<br>・上層覆土と異質の土が充填<br>・小砂礫や土器細片を含む<br>・砂質土ベース、ブロック状の混合土ベース   | SX02・04・10・12<br>SX12（砂質ベース） SX10（ブロック混合土） |
| ②混合土 2  |  |
| ③單一土<br>(埋土中)<br>ア<br>・小砂礫及び土器細片が痕跡 C 類の埋土上位にあるもの<br>イ<br>・小砂礫及び土器細片が痕跡 C 類の底面にあり、その上部<br>・主体的覆土は砂か砂質系土壌であるもの | SX02・04・10<br>SX02・04・10・12                |

以上のように各遺構痕跡について分類に沿って抽出を行ったが、これらの痕跡の共通性については、  
1. 中分類の分布状況が「弱規則群集型」若しくは「弱規則短距離型」

2. 小分類の痕跡間ピッチが「中型（0.6～0.8 mにピーク）」若しくは「小型（0.8 m以下）」

3. 最小分類の埋土・覆土が「混合土 1」

となる。これらの共通性から導き出される評価についても小鹿野が推定分類を行っており、C-2 類（意図的施工 1：補修痕跡）、C-3 類（意図的施工 2：基礎地業）、C-4 類（意図的施工 3：階段状掘り込み）、C-5 類（自然形成：使用による凹凸）、C-6 類（掘られた穴）、C-7 類（性格不明）に該当している。また、これらの痕跡が道路遺構に限定されるものではないため、自然現象的と考えられる「牛馬歩行痕跡」を含め、形成要因について諸説を想定して判断しなければならない。

今次調査では、波板状連続土壌と付随する道路遺構というものは確認していない。単独での検出であるために、その性格の判断が難しい。しかし、先述した各属性の抽出や分類について再度、各遺構の形成過程を復元し、性格の可能性を検討する。

SX02 検出時は溝として確認し西側へ向かって階段状に低くなり溝から不定形な遺構へと確認した。  
不定形部が掘削後、波板状連続土壌に発展している。掘削時に埋土中に硬化部分（土層観察によるもの）が認められ、溝部及び不定形部（波板状連続土壌）の壙底に無数の小礫を検出した。溝部では意図的に敷き詰められたものと判断しており、不定形部（波板状連続土壌）についても同様である。構造としては溝及び不定形部（波板状連続土壌）が掘削され、小礫を敷き、上層覆土とは異なる土を充填し硬化している状況である。この硬化部分については 1. 人為的に硬化させた 2. 埋没過程で自然現象的に硬化した、が考えられ、前者であれば道路遺構に伴う、若しくは何らかの構造物の施工痕、後者が牛馬歩行痕として捉えられるのではないか。

SX04 最終覆土が SX02 を切っており、検出時は不定形な遺構である。掘削後、波板状連続土壌として発展し、最終的には SX02 と繋がる遺構となる。埋土及び壙底については SX02 と同様である。

SX10 弱規則短距離型である。西側が削平を受けているため埋土の状況が不明確であるが、土壌平面形狀が完掘時で東側が円形を呈し、西側で梢円形を呈している。また、西側の梢円形土壌のピッチがほぼ一定（約 65 cm）を保っており、これは道路痕跡で検出される他事例と近似した傾向にある。

SX12 弱規則群集型で放射状に展開し、東側へ階段状に近い形状を取りながら低くなる。地山が砂質系で形成されており、覆土も砂質系である。また、硬化した覆土ではなく地山に近似した 1 cm 程度の黄色粒を含んでいるのが特徴的である。土壌ピッチが約 60 cm～70 cm のピーク値をとる。覆土・壙底には小礫が見られるものと全く存在しないものがある。また、平面形態が不定形で大きさ（一遺構あたりの規模）にもバラつきがある。砂質覆土と土壌間ピッチが道路遺構に伴う波板状連続土壌と近似した要素を持つ。ただ、不定形な平面形態と規模は道路遺構に伴う検出例が少ないため、牛馬歩行痕跡をも含めて考えなければならない。

ここまで、検出遺構の各属性を抽出し推定を試みたが、性格を決定できうるまでには至っていない。しかし、波板状連続土壌は各地で確認事例が増加しており、今後の資料増加と緻密な作業による性格の判断ができるに期待する。また、波板状連続土壌と呼ばれる遺構を発掘調査時にどこまで詳細に観察しデータを取れるかが重要なポイントである事を実感し、今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 小鹿野亮（2003）古代道における路体施工の複合性・道路に残された痕跡の分別理解 - 九州考古学 第 78 号 九州考古学会  
東 和幸（2004）溝状遺構の性格 鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要『縄文の森から』第 2 号

## 写真図版

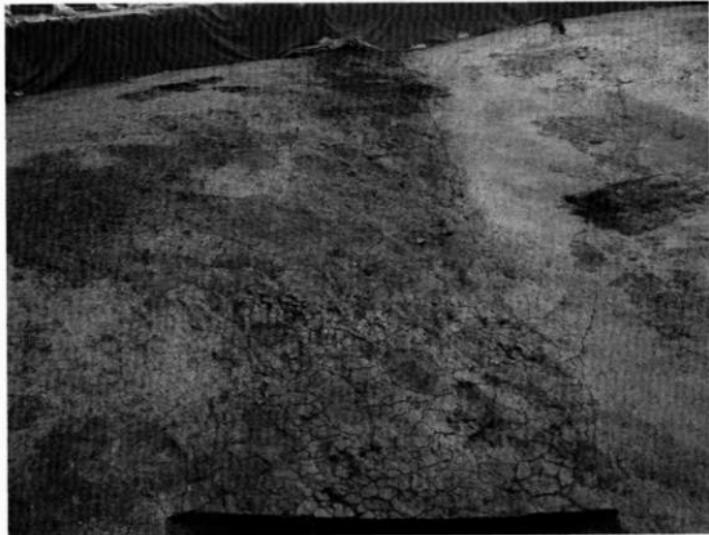


調査区全景（真上から）

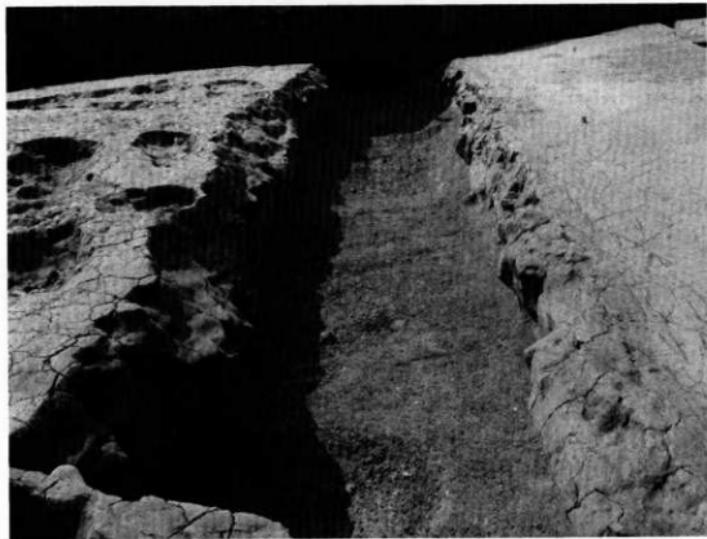


調査区全景（西から）

Pla.2



SD05 検出状況（北から）



SD05 完掘状況（北から）



SX02 土層観察（西から）

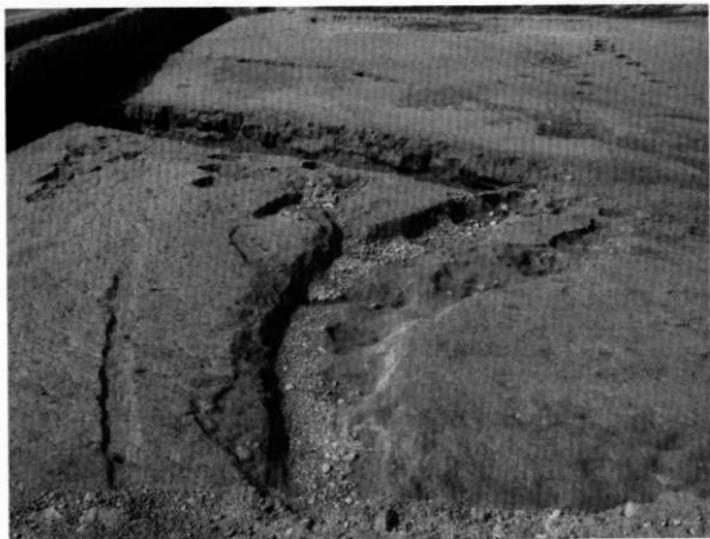


SX02 土層観察（西から）

Pla.4



SX02・04 完掘状況（西北から）



SX02・04 完掘状況（東から）

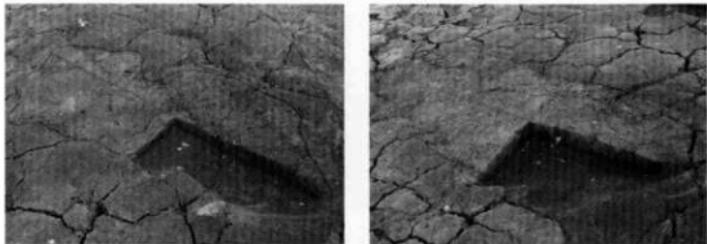


SX02 完掘部分 中央に白磁小片（北から）

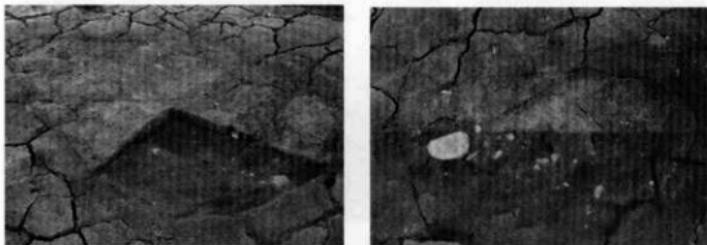


SX10 検出状況（西から）

Pla.6



SX10 土層観察（西から）左 SX10- g、右 SX10- h



SX10 土層観察（西から）左 SX10- i、右 SX10- j



SX10 完掘状況（西から）

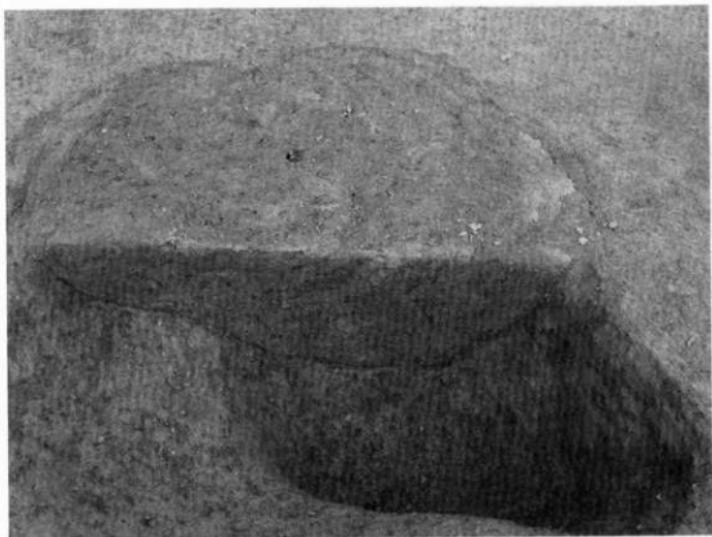


SX10 東端完掘部分（西から）

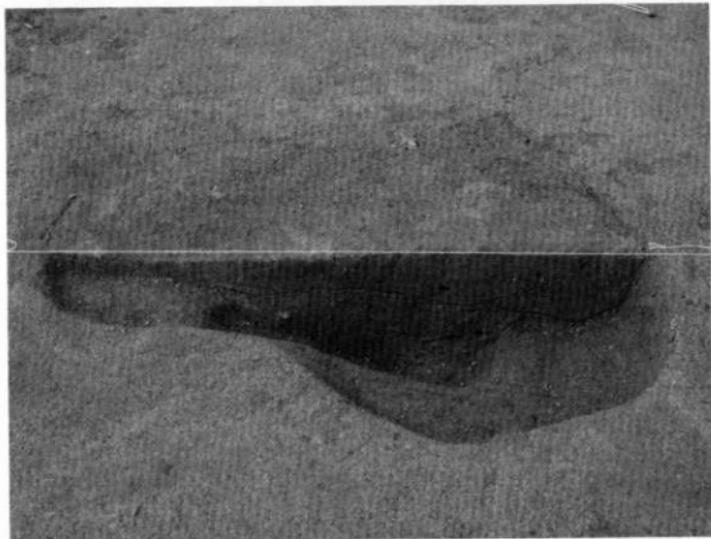


SX12 検出状況（北東から）

Pla.8



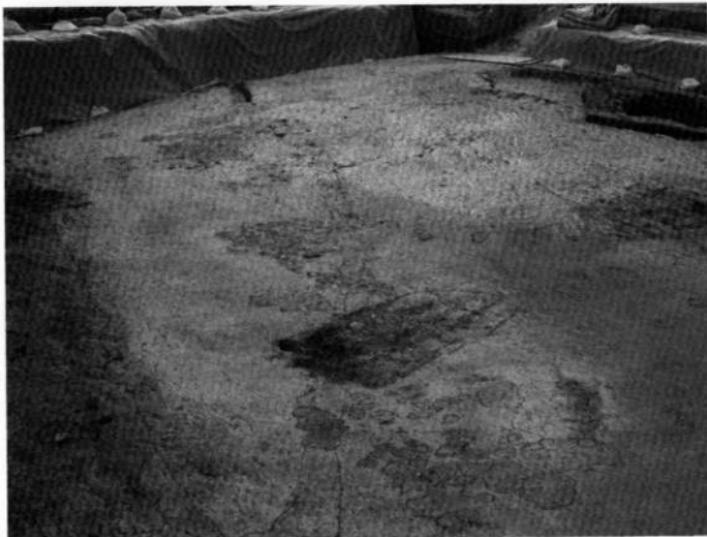
SX12-1 土層観察（南から）



SX12-t 土層観察（東から）

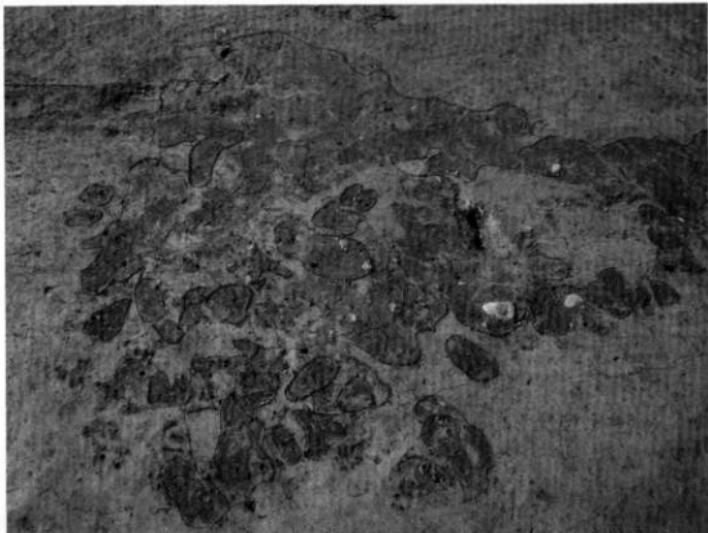


SX12 完掘状況（北東から）



SX13 検出状況（北東から）

Pla.10



SX13 検出状況 (北西から)

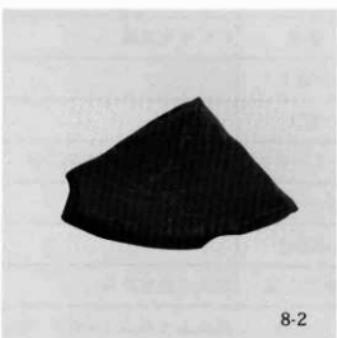


SX13 検出状況 (東から)

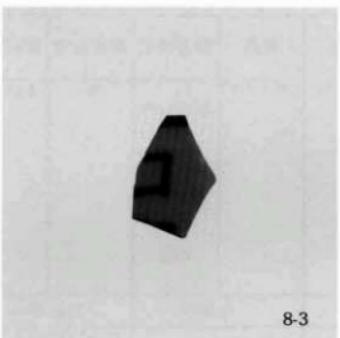
Pla. 11



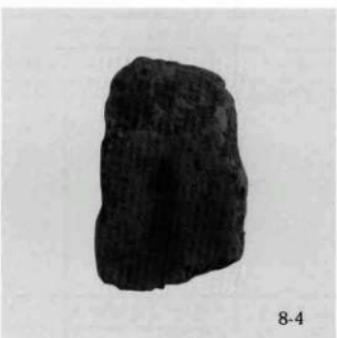
7-1



8-2



8-3



8-4

筑後市文化財調査報告書 第76集

**野町納楽遺跡**

平成19年3月31日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

TEL 0942-53-4111

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

TEL 0952-71-8520㈹